

黄斑変性、軽度の白内障、<sup>せきちゅうかん</sup>脊柱管狭窄症による腰痛、バネ指…。今まで縁遠かった名前の症状が出て、どこの病院でも「加齢からくるものですね」と言われます。「カレー」は大好きですが、すべて「加齢」が原因だと片づけられると、「ああ、そんな歳になったんだな…」とあらためて自覚させられます。「失うもの」が多くなるのは仕方ありません。ネガティブに受けとると気が滅入ります。でもよく考えると、歳をとることによって「得るもの」だってあります。六人の孫たち。この5月には「七人目」の男の孫に恵まれる予定です。保育園に通っているおかげで出会った保育士さんたち、保護者のみなさん。信頼できるお医者さんたち。スポーツクラブで知り合いになったおじさん(おじいさん)たち(お婆さんたちは苦手です)。もう四十~五十代になった桐生・川内中と太田・西中の卒業生たちとの同窓会。そして教会からいただいたこの『…塾』の担当等々、〈新しい出会い〉に恵まれます。この年になったからこそ神さまから贈られるプレゼント — と受けとれば、年をとるのも捨てたもんじゃありません。特筆すべきは、たくさんの祈りができるようになった毎日でしょうか。洗礼の恵みを受ける前には考えられなかったことです。今回から「祈り」について考えていきたいと思います。

### ✠ 「祈る」ということ (1)

日本人ほどたくさんの「対象」に向かって祈る人たちは、世界中にまれではないでしょうか？ 多くの方が、子供が生まれたり七五三のお祝いがあると神社へ、春や夏にはご先祖様の墓参りにお寺へ、家を新築するときには神主を呼んで鍬入れの儀式を、暮れになれば「クリスマスだ」ってんで大騒ぎを…と、神道・仏教・キリスト教がごちゃ混ぜになるうが、さして疑問にも思わず手を合わせています。日本人の多くは宗教に関しては「不思議の国の住人」だとわたしは思うのですが…。

### 「日本人の宗教観」について

(1) <sup>たけしたせつこ</sup>竹下節子先生(比較文化史家。バロック音楽奏者)

わたしは日本人の宗教観についてくわしく語ることは勉強不足なのでできません。そこで、何人かの先生方のお考えを紹介します。まず、最近手にした竹下先生の『キリスト教は「宗教」ではない』(中公新書ラクレ)から「日本社会の世俗性」に関する文章を要約してみます。

▶「あなたの信じている宗教は何ですか？」と聞かれて、多くの人が「無宗教です」と答えることが多く、日本人は「非宗教的」だと言われます。しかし上掲したような、個人的な「宗教的行為」は一般的に見られます。日本は「世俗的な社会」だと言えます。

▶これは明治時代の「<sup>はいぶつきしゃく</sup>廃仏毀釈」(明治初期に起こった仏教排斥運動。天皇を神として神道を重んじ、寺院や仏像などが破壊された。『大辞泉 第二版』より、以下同様)と国家神道(明治新政府が神社神道と皇室神道を結びつけて作り出した神道。宗教としての神道を国家本位の立場に立って利用したもの。国民に天皇崇拝と神社信仰を義務づけた。)、第二次世界大戦の「敗戦」と、都市集中の核家族化によって、「特定宗教への帰属意識」が世界でも珍しいくらいに薄れてしまったからです。

▶そんな日本でも、昔ながらの社会的な規範意識は多くの人たちに共有されています。「社会的な規範」とは、「他人に迷惑をかけない」・「一族の恥にならない」・「人から後ろ指を指されない」といったものです。仏教由来のものでは、「慈悲」・「施し」の概念があり、他者に対して優しい視線、

言葉、奉仕、気づかい、分かち合い、もてなしをするなどがあります。善い業を積むことで自分を高め、安らぎを得るようにします。

▶ふだんは自己中心的で功利的に生きている人も、大災害で多くの犠牲者が出ると、無常観にとらわれて宗教家の知恵に期待し、慰めを得ようとしします。そんな時の仏教は経典や儀式でもなく、法事や墓の管理者でもなく、まさにブッディズムという「生き方」の指針であって、哲学です。

▶宗教としてはゆるい感覚をもつ多くの日本人ですが、平和に暮らす知恵を共有している感性もっています。さまざまな宗教的な説明や教えの内容に、科学的な見地から突っ込みを入れたり、批判したりというような「野暮なこと」はしません。日本人の宗教離れは「無関心」が主流です。

(2) 隅谷三喜男先生 (1916-2003、経済学者。東京大学、北京大学名誉教授)

隅谷先生は、日本人にとって宗教は「個人のもの」というより「家のもの」であり、家としては仏教を信じ、お寺の檀家であり、村落(共同体)の構成員としては神社の氏子となり、祭で神輿をかつぐ — というように、たいてい二つの宗教を信じていると捉えます。そして日本人はこの「信仰の二重性」をあまり気にせず、『信仰がかならずしも一人ひとりの主体的な告白となっていない』と指摘されます。さらに、信仰の内容はあまり問題ではなく、ひたむきな心というような「生きさま」だけを問題とし、それを信心と呼んだりして、「鯛の頭も信心から」ということわざがあるように、その対象は鯛の頭でも、山でも、森でも、キツネでも、オオカミでもよいとされます。

(3) 高山貞美先生 (上智大学神学部教授)

「パウロと親鸞」の研究をライフワークとなさっている高山先生は、日本人の生き方や日常生活は仏教と神道におけるさまざまな宗教儀礼の中にあり、現代の日本人の多くは「無宗教」を自認しつつも、暮らしの節目節目に宗教を意識しているが、その宗教に対する態度は、「深化」を見ない宗教心であると指摘されています。

(4) マウルス・ハインリッヒ先生 (Maurus Heinrichs, 1904-? ドイツの神学者。東京聖アントニオ神学院教授などを歴任)

中国や日本の宗教思想を研究したハインリッヒ先生は『神の秘義』の中で、多くの日本人にとって神の存在は『「意識した肯定」でもなければ真理の問題でもなく』、『人間社会のよりよい成立過程と個人の人間性を豊かにするうえでの機能的・効用的役割を果たすものに過ぎない』と考えます。

つまり、「自分」の人間形成と、自分をとり囲むある一定の人間社会の安定・発展にとって有益なものである限りにおいて、その必要性が評価されてきたとみます。日本人は宗教心や宗教的情操を豊かに持っているけれど、自分が個人的に「神はいる」と思いながら生活する限りにおいて神は存在するにすぎないというわけです。

以上4人の先生方の「日本人の宗教観」に関するお考えを紹介しました。ここで、よりわかりやすく理解していただくために、2000年代に入ってまもなく江原啓之氏を中心起こった「スピリチュアル・ブーム」を例にとってみます。覚えている方もいらっしゃると思いますが、守護霊や前世の力を借りて「今の自分をどうよく生きるか」、「悩みからいかに救われるか」などを説く — というものです。香山リカ先生 (立教大学現代心理学部教授。精神科医、評論家) は、このブームはスピリチュアル・カウンセラーと名乗るひとが「オーラ」・「波動」・「直感」などの用語を駆使して語る受容や肯定、なぐさめのことばを、実人生の悩み・苦しみ・虚しさから抜け出したいと願う人たち (多くは女性) が求めたのが背景にあると考えます。香山先生はそれを『圧倒的な自己中心主義である

「現世利益追求」であり、個人の幸福なのだ』と指摘します。さらに、江原氏の信奉者たちはより深く宗教的世界に入りたいわけではなく、それはなぜかという『宗教は自分だけを救うものではないから、というところにあるのではないか』と受けとり、彼らは『自分の悩みを「軽く・早く・マジカル(魔術的・魅力的)に」解決してくれることだけを望む』と看破されます。

片山はるひ先生(上智大学神学部教授)によると「スピリチュアル」とは本来、「spirit(聖霊・神の息)」に動かされ、キリストに倣<sup>なら</sup>って生きること、すなわち「神とともに生きる」ということです。「あくまで私」にこだわるスピリチュアルは、宗教的な装いはとっているものの、じつは宗教からもっとも遠いものと言えると香山先生は書いています。

### 深化を見ない宗教心 — 受洗前のわたしの宗教観

先生方の考えを読んで、宗教に関する自分の立ち地をズバツと指摘されたと感じた方も多いのではないのでしょうか。受洗前のわたしがそうでした。我が家は曹洞宗です。家の近くの寺に墓参りし、正月になれば神棚にご飯を供え、大学受験のときは市内にある天満宮へ合格祈願に行き…と、その寺や神社がどのような教義をもっているのかなどまったく知らず、知ろうともしませんでした。両親が行うことに従っていたというのが信仰に対する姿勢でした。宗教には無関心に近い状態だったと言えます。若い頃はみんな、そんなものかもしれませんけれど。ただ、「天満宮って、菅原道真<sup>すがわらのみちざね</sup>っていう〈人〉を祀<sup>まつ</sup>っているんだよな。道真って学問の神様として知られているけど、ひとりの人間。人間が神さまになれるの？」という神道への懐疑や、「曹洞宗って道元が伝えた禅宗。座禅で無念無想の境地に入って悟りを求める〈自力本願〉の宗派だけれど、人間はホントに自分の力で永遠の真理を手にするのかなあ？」という自分の家の宗派に対する違和感もっていました。

また、近親者や隣組の方の葬儀に参列すると意味不明のお経が流れ、「オレはこんなふうに送られたくないな」という思いをいまくことが多く、そのたびに母校・獨協学園のとなりにある東京カテドラル聖マリア大聖堂で行われた<sup>あまのていゆう</sup>天野貞祐先生の告別式で、パイプオルガンの音と賛美歌が天上から降り注ぐように流れてきたのを思い出し、「ああ、オレもこんなふうに送られたいな…」などと考えたりしていました。

そして、<sup>すぎやまよしむ</sup>杉山好先生にキリスト教への扉を開けていただいたにもかかわらず、就職してからは教員としての仕事に追われ、当時東京・中野で行われていた無教会の集会にも出席できませんでした。「無教会のことをわすれたくない」という気持ちから、四十冊の『内村鑑三全集』を買ったのですが、日露戦争に関する話(反戦論)を『歴史』の授業の資料にした程度で、拾い読みをするのが精一杯。そのほかのキリスト教関連の本を読むこともほとんどない日々がつづきました。ただ、二人の息子たちをカトリック教会が経営していた「愛児園」という保育園に通わせ、幼いときから神さまに触れる経験をさせることはできました。また、勤務校は市内や伊勢崎市、太田市、みどり市にある学校だったのですが、かならず教会の前の道を通って家族の健康と安全をお願いしてから向かっていました。教会がわたしを呼んでいたのでしょうか？ ころの片隅には「もっと聖書や本を読まなくては…」という気はあるものの、「祈り」は浅く、まさに高山先生のおっしゃった「深化を見ない宗教心」でした。<sup>やまおりてつお</sup>山折哲雄先生(宗教学者、評論家。宗教史、思想史)は、宗教には「信じる宗教」と「感じる宗教」があり、多くの日本人が求める宗教は後者であり、神道は「感じる宗教」の典型的なものだといえます。おもしろい指摘ですね。でも、「信じる」と「感じる」の間には、相当な〈落差〉があるのではないのでしょうか。

### 「祈る」という日本語の本来の意味とは

「祈る」という言葉について、手元にある数冊の辞書で調べてみましょう。

- ◆『角川必携国語辞典』：①神仏に願う。②心から希望する。
- ◆『大辞林 第三版』：①神や仏に願う。祈願する。②心から願っている。希望する。望む。
- ◆『ベネッセ表現読解国語辞典』：①〈知識・助力などを求めて、また、感謝・讃嘆や悔い改める気持ちなどを表わすため〉神や仏に向かって一心に唱えたり念じたりする。②〈自分の願いや希望がかなうことを〉心から求める。③〈相手の幸せや成功などを〉心に強く思う。
- ◆『大辞泉 上巻』：①神や仏に請い願う。神仏に祈願する。②心から望む。願う。

ここまでは私たちも同じように理解している内容だと思います。さあ、次をよくお読みください。

- ◆『新明解国語辞典 第七版』：①〈だれニなにヲ〜〉〔自分の力ではどうしようも無いときに〕神仏の力にすがって、よい事が起こるよう願う。〈自分の身の上にはよい事が、他人には悪いことが起こることを欲したのが原義〉②〈なにヲ〜〉他人の上によりよい事が起こるように心から望む。③心から希望する。願う。

もう一つ。私には全部(全20巻)揃えると高価すぎて(21万円)買えない辞書から、<sup>やまうらはるつく</sup>山浦玄嗣先生が引用されています。

- ◆『日本国語大辞典』：①神仏に請い願う。(イ)言葉を口にして神に福を求める。(ロ)ある人に危害が及ぶようにと神仏に祈願する。のろう。②山伏や僧侶が怨霊・悪魔を降伏するために定まった儀式を行う。③心から希望する。(以下、略)

ここからわかることは、「だれに」祈るかといえば「神や仏に」、「何を」祈るかといえば「自分の」願いや夢、希望が叶い、良いことが起こるように ― と祈るわけです。『表現読解―』の③と、『新明解』の②だけに「他者の」幸せや成功を願うことと書かれています。それ以上に注目していただきたいのは、『新明解』①の〈 〉内、『日本国語大辞典』①の(ロ)です。

「祈り」とは、どの辞書を見ても「神仏に《自分本位の要求》をお願いする」ことです。そして驚くことに、『新明解』に〈自分の身の上にはよい事が、他人には悪いことが起こることを欲したのが原義〉とあります。究極の自己本位、エゴイズムこの上ないことが、「祈り」という言葉が本来もっていた意味なのです。では「祈り」と訳された言葉のギリシャ語はなんという単語なのでしょう。次回、山浦先生に教えていただきたいと思います。

神さま、わたしの孫たちのあなたへの祈りは、「かけっこでいちばんにしてください」というような「幼いいのり」です。でも、その「いのり」がいつか「あなた」に向けて、あたたかく・ふかく・ゆたかな「祈り」になるようお導きください。そして、私たちにも<sup>おきなご</sup>幼子にはたらく「神に向かうところ」をもっともお与えください。

(2018.01.14.)

#### 【引用・参考にした書籍など】

- ・竹下節子『キリスト教は「宗教」ではない』（中公新書ラクレ、2017）
- ・隅谷三喜男『私のキリスト教入門 ― 使徒信条による』（日本キリスト教団出版局、2009）
- ・高山貞美『日本人の宗教とカトリック信仰 ― 宗教間対話の立場より ―』（2007年上智大学夏期神学講習会の講義より）
- ・マウルス・ハインリッヒ、福田勤 訳『神の秘義 ― 唯一・三位一体の神 ―』マウルス・ハインリッヒ講義集(V)より(中央出版社、1960)
- ・香山リカ『スピリチュアルにハマる人、ハマらない人』（幻冬舎、2007）
- ・片山はるひ『永井隆の人生と著作に学ぶ ― 信徒の霊性(スピリチュアリティ) ―』（2007年上智大学夏期神学講習会の講義より）
- ・『大辞泉 第二版 第1巻』
- ・山浦玄嗣『イチジクの木の下で (下巻)』